統一思想における真理概念：解釈の枠組みとしての真理の二性性相

野田啓介　Ph.D.
統一神学校哲学准教授
ニューヨーク

概要

神の二性性相の概念は、神を絶対的で、かつ相対的、無限でかつ有限、永遠で、かつ時間的、超越的でかつ内在的なものであると説明している。絶対、無限、永遠、超越した神は、その性質を相対的、時間的な被造世界に顕現している。例えば、神と人間が相対的なパートナーであるという関係は、家庭の親子の関係として顕現させている。統一思想は、真理を神の内在的な原理であると理解し、それを絶対と相対、無限と有限、永遠と時間、超越と内在の緊張関係のなかで理解している。そして、世界に現象化した真理は、またかかる二性性相をおびることになる。この観点から見ると、諸宗教における真理は、それ自身、絶対で永遠な真理でありながら、部分的で、相対的、時間的なものと見ることが出来る。同様に、社会、自然、人文諸科学においても、真理は、相対的、時間的なものありながら、明確に神の真理を現すものではないにしても、神の真理を暗黙に、相対的に示唆するものと見ることが出来る。統一思想の真理の二性性相の概念は、宗教と科学の真理概念を解釈する枠組みを与える。この真理概念は、真理の探究を、相対主義に陥ることなく、継続する開かれた過程としてとらえ、また絶対的で超越的な神の真理への探求の過程としてとらえる。顕現した真理は常に部分的で、相対的であるために、真理の全体への探究は、終わりのない無窮の目標となる。宗教の真理は神への直接的な言及をし、科学の真理は、暗示的で、婉曲的な神の真理への示唆にとどまることになる。

序論

真理概念は、それぞれの哲学の一部であり、それぞれの哲学がもつ枠組み、問題設定、限界設定、方法論によって異なる。例えば、真理の対応説—主要な説であるが一は、真理を概念や信念と実在の対応ととらえる。この真理説は、主観—客

観の二元論や、言葉と実在の対応を考えるある種の言語哲学の枠組みのなかで主張されている。真理の構成説は、真理を社会的、歴史的、文化的に作られたものと考え、歴史主義や文化的相対主義の枠組みの中で、考えられている。同様に、プラグマティズムの真理概念は、真理を実践的現実的な有効性から定義し、プラグマティズムの哲学的枠組みの一部となっている。

統一思想の真理概念は、統一思想の構成要素である。しかし、統一思想自身の哲学的特長の分析が、いまだ十分になされてはいないので、その真理概念の解明はむしろなされるべき課題である。本論は、真理概念をその構成要素として含んでいる、統一思想そのものの基本性格の解明の課題をも担っている。

I. 統一思想の一般的特徴

A. 予備的論考：真理の浸透性について

真理は、すべての過程に働いている究極的な原理である。真理の概念は、二性性相、関係、実体化、顕現、その他すべての局面を包摂している。真理は、対象として考察されている事象（真理）にも、考察している過程そのものにも既に働いている。真理が何かと考察している時、対象化されているものにも、対象化、概念化する思惟の働きの中にも既に働いている。真理の働きがなければ、思惟することも、対象かすることも、概念化することも出来ない。したがって、真理の考察は、既に働いているものを反省的に考察せざるを得ないという、循環を伴わざるを得ない。

B. 有神論

統一思想は、有神論の枠組みの上に設定されている。その真理概念は、神を永遠、絶対、無限、唯一と考える有神論的存在論に結びついている。そのため、第一に、真理を永遠、絶対、無限、唯一のものと捉え、この真理概念は多くの有神論と共通している。

C. 性相と形状の二性性相

統一思想の独特の神概念のひとつは、性相と形状の二性性相である。この概念は、心と身体の二重性のアナロジーで、内的・外的、無形・有形の二重性として、説明されている。

二性性相の概念は、他の二重性：絶対と相対、永遠と時間、超越と内在、普遍と個別、唯一性と多様性、霊的と肉的等にも適応しうると思われる。[1]この二極が生み出す場の中で、人は神と出会う。言い換えれば、統一思想における神は、単に、超越、絶対、永遠の存在ではなく、相対的、有限、時間的な世界を創造し、自らが人間のパートナーとなるという形で、人間を創造された。神と人間（そして世界）の相互依存性は、統一思想の独特な神概念のひとつである。神は、永遠、絶対で、超越していながら、同時に相対的で、時間的で、内在している。パートナーということは、神が、人間とその歴史によって影響を受けることを意味する。宗教的な表現を使えば、神の愛は、絶対で永遠でありながら、人間の状態によって、喜びあふれたり、悲しみにくれたりする神であり、人間の意思決定の結果が何をもたらすかは予知しうるものの、人間がどういう意思決定をするかは、予知し得ないということを意味する。[2]

古典的な有神論は、神を超越し、絶対で、永遠、無限、かつ不変の存在であると理解した。完全性の概念を、不変と理解し、逆に、変化を不完全性と見ていた。統一思想は、異なった見解をもつ。伝統的な有神論は、同様に、真理を超越、絶対、不変と見たため、最終的で、絶対に変わらないものと捉えている。諸宗教における真理概念には、かかる最終性、完全性、絶対性という要素が伴っている。

多くの諸宗教は、信仰の真理の究極性、絶対性を主張している。その真理の中には、聖典、教義、儀式、習慣等を含んでいる。これらのものは、それが神から来たものであると主張することによって、その正当性を主張する。しかし、それぞれの宗教の歴史をひもとくと、実際には、かかる事物は、歴史的変遷をとげてい

---

[1] 本論文では、絶対と相対の二重性について論じるが、これは、あくまで統一思想の有神論の枠組みの中で論じているものである。相対性ということは、神性が個別的、相対的関係の中に現象化するということを意味しているのである。本論は、復帰歴史上における相対性、神の存在とは離れた価値の相対性等を論じるものではない。

[2] 統一思想における神のオープンネスは、オープン神論（Open Theism）の立場に共通するものがある。Pinnock, Clark H. *The Openness of God: A Biblical Challenge to the Traditional Understanding of God*. Downers Grove, Ill: InterVarsity 参照のこと。

るのだが。諸宗教におけるいわゆる「真理」は、時に互いに矛盾し、対立することもある。ある宗教における主張が真理であり、他派は誤りであるのか、それとも全ての真理が相対的で、真理が絶対的だという主張そのものが誤っているのか、それともそれ以外なのだろうか？統一思想はどう答えるのだろうか？

統一思想は、真理の二性性相から答えるように思える。神における真理は、絶対で不変であるが、同時に、常に相対的で、部分的に現象化する。例えば、神の愛は、その本性は絶対で不変であるが、それが実体化して、現象化する際には、常に部分的、相対的、可変的なものとして現れる。人間を通して、世界に現象化した神の愛は、際限なく成熟し、広くなり、深遠なものになり続ける。神の愛は、汲み尽くせず、同時に、各々の段階において、それ自身においては絶対的である。同様に、神の真理は、絶対で無窮であるが、常に部分的に、相対的に現象化する。神の真理は、その本性において、どの段階においても絶対で永遠である。統一思想において、神が絶対と相対の二性性相をもっているのと同様に、真理も二性性相でとらえることが出来るように思われる。

人間が把握しうる真理は、それ自身無限である神の真理の全体すべてを究め尽くしたものではないが、人間にとって、相対的、時間的に現れた超越的な神の真理は、絶対、永遠、無限という性質を持っている。これは、人間が、真理は把握し尽くしたという最終宣言が出来ないことを意味している。これは、相対主義でもないし、また単純な絶対主義でもない、二性性相の真理概念である[3]。それは、人間の真理経験というものが、有限世界における神性の経験であり、しかも、それは、終わりのない、開かれたプロセスであることを意味する。人間の認識論的な限界の問題を、別にするならば、真理の二性性相という存在論的構造は、絶対で永遠の真理を、相対的で、時間的な世界への顕現として把握することを可能にする。

無窮の神の真理は、相対関係の中でのみ現象化するので、真理は必然的に絶対かつ相対的となる。逆に相対的な関係は、かかる設定そのものを絶対的なものとして前提としている。例えば、数字の２，３，５そのものは、真でも偽でもない。しかし、２＋３＝５は真であり、２＋５＝３は偽である。真理は、かかる関係の中

[3] 統一思想の真理概念は、絶対と相対の統一を概念化した四位基台の概念によっても表わされる。

においてのみ現象化する。更に、概念化の過程そのもの、言語化そのものが、それ自身相対的な要素の体系である概念とルール、言語要素とそのルールの結果である。かかる諸過程の中で、概念と言語的要素の関係の中で、「意味」というものが可能となる。

真理の二性性相は、また次の点も含意している。神における真理は唯一であるが、各自に多様な形で現れることを示唆する。一個人に示された真理は絶対で永遠であるが、それは常に一部で、相対的でもある。したがって、人間は、自分に提示されたもの以外の真理を把握するために、自分以外の人が必要となる。例えば、男性に示された真理と女性に示された真理が、別の側面であることは、ありうる。私は、あなたを必要とし、あなたも私を必要とする。真理の全体を把握しようと求めることにより、人と人のダイナミックな授受作用、インターラクションが、喚起されることになる。

真理は、常に部分的に、かつ相対的に顕現するために、真理全体の顕現をめざして、相互協力し、他の人の理解を広く求めざるを得ない。統一思想もまた、真理の全てをくまなく提示したものではなく、真理の顕現になぜ相互協力、他者が必要であるかを説明し、その根拠を提示するものである。

この考えを、自分だけが、絶対的真理を保持していると主張する諸宗教にあてはめてみるならば、それぞれの信仰が、絶対永遠の真理を、相対的、時間的（歴史的）、限定的に見ているに過ぎないという結論になる。真理が、各人に独特なかたちで開示され、顕現するように、真理は相対的に開示される。したがって、真理の全体の顕現は、求め続ける、終局のない永遠の課題となる。超宗教、超教派、また非宗教的な協力は、単に実践的な課題であるばかりでなく、真理の構造そのものに根ざしている。

真理の相対性、部分性は、統一思想そのものにもあてまはる。厳密に言えば、統一思想は、メタ・哲学的レベルで真理概念を論じ、さまざまな真理概念を理解するための思惟の枠組みを扱うものである。諸宗教で論じられる真理が、それ自身神の絶対的、永遠の真理でありながら、包括的な真理のすべてをくまなく現したものではないことを説明する。後に論じるように、信仰や啓示に訴えることは、問題を解決するのではなく、信仰や啓示の問題は、解釈学の問題として論じられるべき課題である。

後に論じるように、メタ・哲学的（哲学そのものを対象として考察すること）な解釈の枠組みを提示することによって、統一思想は、自然、社会、人文科学への大きな思想的枠組みをも提示する。

D.　真理と関係

もうひとつの統一思想の重要な原理は、存在と関係の相互規定である。存在は関係の中においてのみ可能であり、関係も存在の関係として即応している。統一思想は、この即応を神自身にも適用している。

統一思想によれば、神は、人間を自身の愛のパートナーとして創造された。神は、かくして人間との共存関係のなかで存在している。したがって、神が何であるかという神の規定は、人間との関係を通じてなされ、逆に、人間は神との関係の中においてのみ存在し、人間のアイデンティティーは、神との関係を通して規定される。統一思想は、この神と人間の根本的な関係を、親子の関係と規定している。

存在の関係性は、真理が関係的概念であることを示唆している。それは、真理が、関係の中で、顕現する事象であることを意味する。統一思想は、全ての存在が宇宙の他の全存在と、相対関係をもって存在していると考える。存在の関係性は、統一思想では、「連体」という概念でとらえられている。全ての宇宙に存在するものは、連体ととらえている。

この関係性への理解は、西洋哲学における「真理の対応説」に呼応する。真理の対応説は、真理を心にある考えや信念と客観世界にある現実、事実との対応であるととらえる。もし、考えが事実と一致すれば、その対応関係が真理として把握される。

この対応は、思惟と世界が、関係しうるべく存在構成されていることを前提としている。たとえ思惟と世界の対応を論じたとしても、一体何が対応しているのかという問いが残るからである。統一思想は、相似性の原理で、この問題に答えている。

E. 相似性の原理

統一思想によれば、神はその性質を人間に賦与し、人間が神の品性を顕し、神に似るものとなる。更に、神は人間以外の諸存在を人間のイメージに似せて創造した。人間以外の諸存在は、したがって、人間に対応した要素を持つ。統一思想は、このように、神と人間、人間と諸存在の間に類似性があると論じ、それゆえ、対応していると論じる。対応している要素そのものは、しかし、非明示的に可能性として存在している。相似性の原理は、人間が世界を理解する可能性を説明する統一思想の概念である。真理の対応説は、思惟と実在の対応を真理と規定するが、統一思想は、その対応関係を存在論へと更に展開している。

F. 個性真理体

統一思想には、二つの主要な存在概念がある：個性真理体と連体である。前者は、それぞれの個別的存在を、真理の固有な顕現であるという見方であり、後者は、それぞれの存在が、他の存在との関係の中においてのみ存在している見る見方である。存在を個性真理体という概念でとらえているということは、統一思想が存在を感性的なあり方、物体性からとらえるのではなく、あくまで真理の現象化として捉えているという観点をあらわしている。更に、真理体という概念は、真理の実体化を意味する。イエス・キリストが、「私は真理を所有している」とは言わず、あくまで「私は真理である」と語ったように、真理は、得たり失ったりしうる所有物ではなく、実体化し、体現するものであることを意味している[4]。

G. 神の二性性相の世界への現象化：家庭

神と人間の相互依存的存在性は神と被造世界の関係の中心である。文師は、神と人間が親子の関係にあることを、宇宙の根本真理、天の秘密であると語られている。統一思想は、家庭における親子の関係を、神と人間の親子の関係が顕現したものであるとみている。

真理の体現化は、人間が神性を現してゆく過程であり、この過程は、過程における人間関係をとおして実現される。子供にとって、目に見えない神の属性は、そ

---

[4] 真理の体現については、 Noda, Keisuke. “Understanding the Word as the Process of Embodiment ,” *Journal of Unification Studies* Vol. 1, 1997. を参照のこと。

の父母を通して現れる。同様に、神の絶対で、無条件の愛は、夫婦の関係、兄弟姉妹の関係を通して現れ、その愛は、家族以外の社会の人々に同様に展開される。無限で絶対の神の愛は、かくして、家庭における相対的、時間的な人間関係を通して、現実的に顕現し、実体化される。

統一思想の完全性の概念は、また、伝統的有神論の完全性の概念とも異なる面がある。統一思想においては、完全性は、最終的な段階でも、絶対的な不変性（一切の変化がないと）という意味でもない。個人は人格完成をなして、結婚の段階に入る。個性完成は、成長過程における、一段階である。しかし、個人は、完全であったとしても、真理の顕現を永続的に続ける。肉的霊的成熟、人格の涵養、真理の実体化は、生涯を通してなされ、自分の家庭を成し、更にその愛を社会全体に広げ、適用してゆく。[5]

II.真理と解釈

A.　啓示と解釈の枠組み：解釈の妥当性

統一思想の有神論的な視点は、啓示の問題を提起する。統一思想では、啓示は、ふたつの観点からアプローチしうる：存在論的なアプローチと歴史論的なアプローチである。啓示は、神の人間へのメッセージと考えられる。一方において、世界そのものに刻まれた真理は、神の自然的啓示であと見ることが出来る。他方において、歴史の特定の時に、復帰の目的で人間に与えられたメッセージも啓示と見ることが出来る。

啓示は、解釈を必要とし、解釈は、解釈の枠組みを必要とする。更に、解釈の有効性は、複雑な解釈の循環を伴う。例えば、聖典は啓示とみなされているが、その解釈には理解の枠組みを必要としている。啓示の内容は、それを解釈する枠組みの違いによって、大きく異なる。したがって、啓示の正しさは、その解釈の枠組みの正当性の問題を提起する。枠組みの正当性は、それを確定する基準を求め、そのプロセスは、無限に退行してゆく。

---

[5] 完全性に対しての、詳細な説明は、Chapter 1 Section 3 “The Purpose of Creation,” and section 5.2.3 “The Realm of Direct Dominion” in *Exposition of the Divine Principle* (HAS-UWC, 1996) pgs 32-36, 44-45.　を参照のこと。

更に、ある知識が啓示であると信じて、主張したとしても、それがそのままその知識の正当性を確立するわけではない。むしろ、真理の真理性、真理の基準は、その知識の源泉以外のところにあるように思われる。更に、その知識が啓示であると主張した場合、果たして、それが直感であるのか、想像であるのか、啓示であるのか、明確にその区別をどうやってつけ、それを確証するのかという新たな問題を提起する。もし、啓示がある特定の人に、特定の時と、特定の状態でのみ与えられるとするならば、その啓示は、その人にのみアクセスできるものとなる。その結果、その知識が啓示だと訴えたとしても、他の人がその訴えを確証し、その知識の源泉を確定することは不可能である。幻覚と啓示の決定的な違いをつけ難い理由は、観察や実験と異なり、人間の個人的な経験というものが、原理的に他人にはアクセス出来ないところにある。

では、いったいどこで、どのように啓示を確証し、啓示の解釈の正当性を確定しうるのだろうか？　その源泉をある点で、啓示だとしている統一思想の真理性も、論理的一貫性、理論的な整合性、経験との一致等にあるように思われる。啓示的な内容を含んでいる統一思想の理論的正当性は、宗教や諸科学の理論にも共通していることであるが、解釈の有効性という点に帰着すると思われる。解釈学的な有効性から見て、知識の有効性、正当性は、いかにその知識が、経験を含む諸現象を整合的に説明しうるかで決まってくるように思われる。

B. 諸科学の解釈学的次元

解釈学は、全ての形態の知識に適用される。宗教は伝統的に、啓示を含む聖典の解釈に携わってきたため、解釈学が用いられてきた領域である。更に、人文科学は、テキストの解釈に解釈学を用いてきた。社会科学において、ある社会における法や、原理、習慣、ルールの意味は、その社会に住んでいる人が解釈したものである。人々が解釈した法やルールを、更にその社会の外にいる社会学者が解釈する。つまり、解釈されたルールを更に解釈するという、二重の解釈となる[6]。このように、解釈学は、宗教、人文、社会科学において用いられてきた。１９世紀

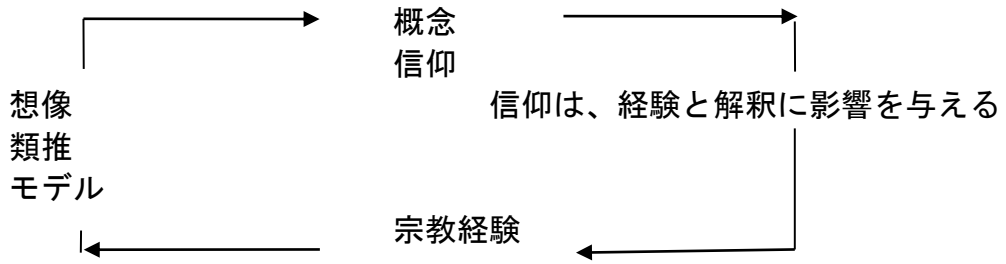
[6]社会科学における解釈学的分析については、Dallmayr, Fred R., and Thomas A. McCarthy. *Understanding and Social Inquiry*. Notre Dame, Ind: University of Notre Dame Press, 1977. を参照のこと。

から２０世紀にかけて、解釈学は、特定の学問の枠組みを超えて、論議された。ことに、ハイデッガーを踏まえて、その弟子であったガダマーは人間存在が解釈的に存在することに基づいて、解釈学の普遍性を論じた。[7]

科学哲学の進展に伴って、自然科学の解釈学的側面も論じられるようになった。自然科学における社会的、歴史的次元の存在を論じたトーマス・クーン、科学的観察データの理論負荷性を論じたラカトスやファイアーアベントの議論は、科学観を、論理実証主義の科学観から解放し、そこに解釈的な次元があることを明らかにしていった。後期の論文　「自然科学と人文科学」（"Natural and Human Sciences"　*The Interpretative Turn: Philosophy, Science, Culture* 1991 に収録）において、クーンは、自らが考え出したパラダイムという概念を、「解釈学的基底」（hermeneutic core）と定義し直し、自然科学と、社会、人文科学の類似性を指摘している。これら諸科学には、幾多の相違点があるものの、その根底には、解釈学の基層が横たわっている。

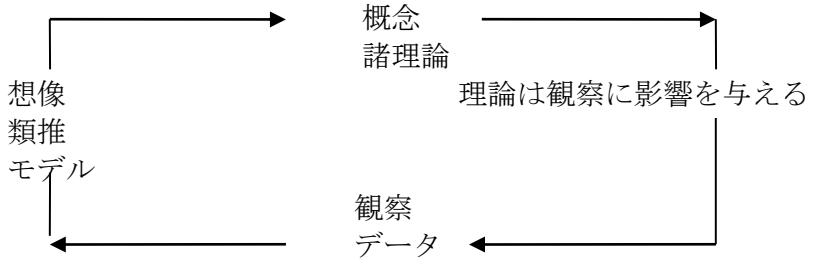
C.　宗教と科学における真理と解釈

クーンが指摘したように、もしも自然科学に解釈学的次元があるならば、宗教と科学の比較は、解釈学から接近しうることになる。イアン・バーバーが、『宗教と科学』（*Religion and Science: Historical and Contemporary Issues*. [San Francisco]: HarperSanFrancisco, 1997.）で論じているように、宗教と科学には構造的な類似性がある：理論、説明のモデル、経験・観察の循環構造がある。



[7] ハイデッガーは、人間がその存在の意味を解釈する存在であることから、その存在論を解釈学的現象学として遂行した。ガダマーは、ハイデッガーの分析を引き継ぎ、ことにその解釈学の面を発展させた。ガダマーは、解釈学の普遍性を論じ、解釈学が単に解釈の技術ではなく、哲学的問いの根底に横たわる普遍的な学である。Heidegger, Martin. Being and Time. New York: Harper, 1962; Gadamer, Hans-Georg. Truth and Method. New York: Seabury Press, 1975. 参照のこと。

物語・儀式
宗教の構造[8]



科学の構造[9]

科学理論は、その観察データを解釈する時の解釈の枠組みを与える。同様に、宗教においても、信仰や概念は、宗教経験を解釈する枠組みを与える。宗教においても科学においても、理論の有効性は、論理的一貫性、整合性、経験との一致等いくつかの基準で決定される。

D.　真理の二性性相と解釈学

もしも、宗教の知識と諸科学の知識（自然、社会、人文諸学を含む）が、本質的に解釈学的であるならば、あるいは、少なくとも「解釈学的基底」があるならば、科学における真理も、解釈の枠組みのなかで解釈されたものとなる；それぞれの個別科学の方法論、問題設定、問題領域が解明する真理を、プラグマティックな真理にしたり、実体的な真理にしたり、社会的・歴史的な真理にしたりするという違いが生じる。個別科学は、その特有の方法論を用いて、観点、対象領域、アプローチを意図的に限定する。統一思想の真理の二性性相的視点を適用すれば、

[8] Barbour, Ian G., and Ian G. Barbour. *Religion and Science: Historical and Contemporary Issues*. [San Francisco]: HarperSanFrancisco, 1997. P. 111

[9] 前掲書

諸個別科学は、それ自身の領域において、真理の更なる解明を無限に目指してゆく過程であり、そこで解明される真理は常に、相対的、時間的（歴史的）、有限の真理である。宗教における真理が、絶対、永遠の真理の時間的相対的現象化であるように、科学の真理も、方法論的に限定された相対的、時間的真理である。

結論：真理の二性性相と解釈学

もし真理が二性性相的であるならば、諸宗教と、諸科学（人文、社会、自然科学）における真理を含めた、人間の理解する真理というものは、本質的に、神における絶対、永遠、無限の真理が、相対的、時間的、有限な形で開示されたものとなる　――　明示的に神と言及するか、しないかという違いはあるが。宗教においては、神への言及は明示的であり、科学においては、神への言及は暗示的であるか、不在かである。しかし、統一思想の観点から見れば、真理は単に探究の対象であるばかりでなく、探求することそのもの、探求の過程そのものに働いている。全ての人間の思惟、問い、言語化、認識、そして存在そのものが、真理によって可能となり、真理によって限定されている。真理の二性性相概念は、真理の動態的、拡張的特質を明らかにし、宗教を含む諸学の真理を、相対主義に陥ることなく、相対世界に限定する。このように、統一思想の二性性相的真理観は、宗教と諸科学の解釈学的枠組みを与える、最も広範な、メタ・枠組みとしての役割を果たすことになる。

参考文献

Barbour, Ian G., and Ian G. Barbour. *Religion and Science: Historical and Contemporary Issues*. [San Francisco]: HarperSanFrancisco, 1997.

Dallmayr, Fred R., and Thomas A. McCarthy. *Understanding and Social Inquiry*. Notre Dame, Ind:

Gadamer, Hans-Georg. *Truth and Method*. New York: Seabury Press, 1975.

Heidegger, Martin. *Being and Time*. New York: Harper, 1962

Moon, Sun Myung. *Exposition of the Divine Principle*. New York: The Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity, 1996.

Noda, Keisuke. “Understanding the Word as the Process of Embodiment ,” *Journal of Unification Studies* Vol. 1, 1997.

Pinnock, Clark H. *The Openness of God: A Biblical Challenge to the Traditional Understanding of God*. Downers Grove, Ill: InterVarsity Press, 1994.

Sanders, John. *The God Who Risks: A Theology of Divine Providence.* Downers Grove, IL: IVP Academic, 2007.

University of Notre Dame Press, 1977.